



Kio 畿央大学

看護実践研究センター News Letter

Vol.7

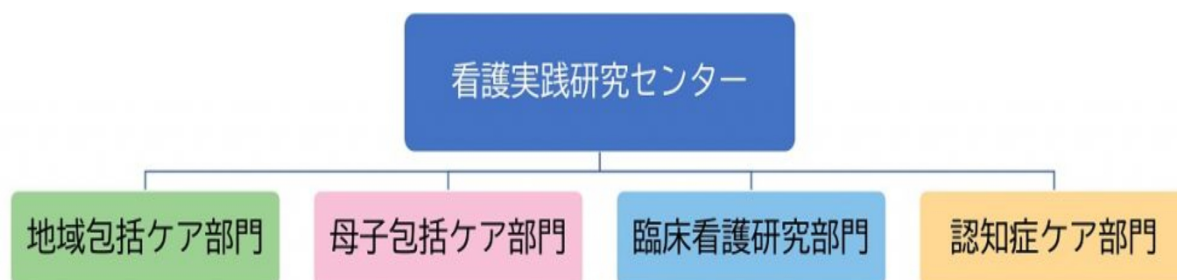
CONTENTS

- 看護実践研究センター長 ご挨拶……………1
- プロジェクト研究……………2
- 各部門の事業報告や来年度の抱負・トピックス
 - 地域連携ケア部門……………2 母子包括ケア部門……………5
 - 臨床看護研究部門……………9 認知症ケア部門……………11

看護実践研究センター長 ご挨拶

看護実践研究センター長
山本 裕子

当センターは、「建学の精神」である「徳をのぼす」「知をみがく」「美をつくる」を基本理念とし、「地域包括ケア部門」「母子包括ケア部門」「臨床看護研究部門」「認知症ケア部門」がそれぞれの専門性を活かして、看護および関連分野の実践家、および研究者に対する最新の看護実践に関する情報提供や、看護実践研究の推進とともに、センターの活動を通して得られた成果を地域の皆様の健康維持・増進に役立てていただけるよう、様々な取り組みを展開しています。



今回のニュースレターは発刊第7号として、各部門の2025年度の事業報告、および2026年度の事業計画や抱負を掲載します。2025年度は組織再編から3年目を迎え、各部門の事業は多くの方のご理解、ご支援のもとに定着し、皆様に期待される活動へと発展を遂げています。さらに2026年度の3つの事業が奈良国立大学機構リカレント教育事業に内定しています。

医療福祉従事者の皆様、地域の皆様、そして本学の卒業生・学生・教員に貢献できるよう、知恵を絞りながら奮闘しています。当センターの活動へのご理解とご支援を賜りますよう、引き続きよろしくお願ひ申し上げます。

プロジェクト研究

2024年度からスタートした第2期プロジェクト研究（研究期間3年）の進捗状況について報告します。

■ 大学を拠点とする子育て世代包括支援～地域連携システムの構築に向けて～

研究代表者 岡いくよ（看護医療学科・教授）

研究分担者 岡田公江（助産学専攻科・教授） 塚田桃代（助産学専攻科・准教授）

西原八重美（助産学専攻科・講師） 澤 寛子（看護医療学科・講師）

堀井有紗（看護医療学科・助教）

日本母性衛生学会で「大学における産前/産後の子育て支援」をテーマに2題発表しました。発表後には会場から、今後の教育・実践を考える上で目新しい教育の視点を得ることができ、地域貢献を含め大学の役割などを考えることができた、とコメントをいただきました。他大学での取り組みに新たな視点を提示することもできたと自負しています。これまでの活動は畿央大学の研究紀要にも寄稿しました。

■ 海外研修が看護学生の自己効力感に与える影響—研修前後の比較と継続的分析による考察—

研究代表者 酒井啓子（看護医療学科・准教授）

研究分担者 祐實泰子（看護医療学科・教授） 對中百合（看護医療学科・准教授）

現在「海外研修が看護学生の自己効力感と進路選択に与える影響」をテーマに調査を進めています。看護医療学科2年生全員を対象とした「自己効力感」に関するアンケートに加え、3月には訪問先である台湾の大学生にも同様の調査を実施予定です。帰国直後には本学2回生にグループインタビューも行い、量的・質的な両面から分析をします。異文化体験が自己効力感をどう高め、将来の進路選択にどう作用するのか。多角的な視点でその教育的意義を明らかにしていきます。

各部門の事業報告や来年度の抱負・トピックス

地域包括ケア部門

部門長：看護医療学科 教授 松本泉美

部門研究員：教授 文鐘聲・准教授 田中陽子・准教授 前田則子・助教 大平俊介

地域包括ケア部門では、乳幼児から高齢者までの保健医療福祉分野における連携および他職種との連携と協働に関する活動を行っています。今年度は、新たに新入教員を部門員として1名増員し、地域看護学領域の教員5名全員が部門員として企画した以下の活動を行いました。

I. 2025年度事業報告

■ 障がい児サポーター育成「障がい児かかわり方セミナー；障がい児の愛着形成支援」

第1回 2025年5月8日（木）9：00～10：30 畿央大学11名

第2回 2025年8月19日（火）14：00～16：00 畿央大学2名

第3回 2026年2月12日（木）9：30～12：00 畿央大学6名

「安心感の輪子育てプロジェクト」の一環として、障がい児かかわり方セミナーを畿央大学で実施しました。参加者は子育て応援ボランティアサークル「Smile」のメンバーや保健師課程の学生です。セミナーでは昨年同様、アメリカのグレン・クーパー、ケント・ホフマン、ボブ・マービン、バート・パウエルによって開発されたCircle of Security「安心感の輪子育てのプログラム」を一部紹介し、愛着についての理解を深めました。その後、障がい児の特徴や愛着形成支援のポイント、家族アセスメントの重要性について、教員の研究成果（科研費 若手研究JP21K17446）をもとに詳しく学びました。また、演習として、プレイセラピー技法を取り入れた遊びのロールプレイを実施しました。参加者は、子ども役と支援者役に分かれ、実際に遊びながら声かけや関わり方を体験しました。

本事業は、シンガポールで開催される第29回EAFONS（East Asian Forum of Nursing Scholars）でBest Poster Presenter Awardにノミネートされました。

*この活動は科研費基盤研究（C）JP24K14212の助成を受けたものです。

（文責：田中陽子）



■「スマイル交流サロン」

2025年10月25日（土）13：00～15：00・10月26日（日）10：00～12：00

「安心感の輪子育てプロジェクト」の一環として、教員や子育て応援ボランティアサークル「Smile」、卒業研究のゼミ学生が協力し、畿央祭ウエルカムキャンパス企画として開催しました。普段、ボランティア活動を行っている養護施設や放課後等ディサービス、重症児ディサービスの児童とその家族やスタッフ、保健師課程の実習先である特別支援学級の児童とその家族を招待し交流の場を提供しました。

初日は、医療的ケア児や障がい児を含む児童14名、大人14名、学生・卒業生14名が参加し、2日目は児童1名、大人11名、学生7名、延べ75名の参加者が集まりました。

参加者からは、学生の配慮が高く評価され、「なかなか気軽に遠足に行けないので、とても貴重な機会でした。先生方や学生がとても優しく、安心して過ごすことができました」との声や、「障がいがあってもなくても、みんなで楽しむことができた素敵な時間でした」という感想が寄せられました。学生たちは、障がい児との交流を通じて子どもの特性に応じたサポートを実践し、教員による障がい児サポーター養成講座で得た知識を活かしました。学生からは「ボランティアで会ったことがある子どもとまた会うことができ、また、初めての子とも関わることができて楽しかったです。参加した子どもも大人の方も楽しんでいる様子を見ることができて良かったです」との感想が寄せられました。

*この活動は科研費基盤研究（C）JP24K14212の助成を受けたものです。

（文責：田中陽子）



■がんカフェ「きらめき」

2025年10月25日（土）13:00～16:00

今年度は、テーマを昨年実施分の継続版「がんになったときに困らないための準備Ⅱ」として、教員によるミニ講演と学生によるアロマハンドマッサージや展示・フリートークコーナーで交流しました。

今回のミニ講演では、がんカフェ「きらめき」を開催するようになった経緯やこれまでの企画の紹介と、がんの予防、がんと診断されてからの相談窓口・治療費と在宅医療になってからの備えについて説明したところ、終了後に多数の質問がありました。アンケートには「来年も参加するので、最新の抗がん剤の情報を教えてほしい」との要望がありましたので、次回に活かしたいと思います。

そして、今年も看護医療学科2回生によるアロマハンドマッサージが好評で、開始早々から順番待ちが発生するほどでしたが、今年は番号札を配布したことで大きな混乱もなく、待ち時間にはカフェコーナーで飲み物やお菓子を食べながら参加された方が懇談する様子が観られ、マッサージを受けた方も笑顔で「気持ちいい」「いい香り」とリラックスされていました。昨年を大幅に上回る50名以上の参加があり、がんカフェ開始後7年が経過し、定着してきたことを感じ、また今後も継続していくパワーを頂きました。
(文責：松本泉美)



■看護実践研究センター地域包括ケア部門研修会 『感染症と人権 — ハンセン病問題から問い直す —』

2025年11月29日(土) 14:00~16:00

感染症と人権侵害の歴史的関係を踏まえ、看護職に求められる倫理的判断力と人権擁護の視点を培い、実践につなげることを目的として実施しました。ハンセン病問題は、日本が国家として重大な人権侵害を引き起こした事例であり、医療・看護が政策のもとで隔離や断種に関与してきた歴史を有しています。本研修会では、その歴史的事実を単なる過去の出来事として扱うのではなく、法制度、社会的偏見、医療者の役割、当事者や家族の体験など複数の視点から多角的に考察し、人権侵害が長期にわたり継続した構造を理解することを重視しました。そして、同様の状況が現代も起こり得ることを前提に、看護職としていかに判断し行動すべきかを主体的に考える教育機会としました。

本研修会の特徴は、学生による長島愛生園訪問報告を中心に据えた主体的学習型プログラムにあります。学生は事前学習、現地見学、グループ討議、発表準備を経て報告を行い、知識の理解にとどまらず、体験を通じた実感と他者へ伝えるための再構成を経験しました。報告内容は、歴史的背景、医療倫理、医療・福祉の実際、社会復帰と共生、振り返りの五領域に整理し、「知識・態度・実践」の統合を意識した構成としました。

研修後、学生の多くは、ハンセン病を「過去の病気」と捉える認識から、「社会が生み出した差別と人権侵害の問題」へと理解を深め、看護職の役割を人権擁護の担い手として再認識する姿勢を示しました。また、当事者家族である黄様のご講演や、家族会の方々との交流は、情意面における深い学びとなり、看護職が担うアドボカシーの役割への理解を一層深める契機となりました。さらに、本研修会を通して、学生が自ら問いを立て、社会の課題を自分事として捉える姿勢が育まれたことは、今後の看護実践を支える基盤形成につながる重要な成果であると考えます。

(文責：前田則子)



II. 2026年度の事業計画と抱負

2026年度は、継続事業に加え、在学生の授業時間を活用して、卒業生である保健師の活動に貢献できるようリカレント教育を兼ねた下記研修を企画しています。

1. 研修計画

看護実践研究センター地域包括部門研修会

テーマ：就学に向けた発達障がい児支援～5歳児健診からの就学支援について～

講演形式：対面による講演会

日時：2026年11月2日（月）13：00～14：30

講師：奈良教育大学 全 有耳（小児科医）

2. 継続事業

■ 母子交流事業「安心感の輪子育てプロジェクト」

★スマイル交流サロンの運営（障がい児とその家族の地域での居場所づくり）

畿央祭ウェルカムキャンパス時に開催予定

★子育てプログラムの実施（講師依頼に応じて日程調整し開催）

・「安心感の輪」子育てプログラム（全8回）

・前向き子育てプログラム（トリプルP）の実施

★障がい児サポーターの育成「障がい児かかわり方セミナー：障がい児愛着形成支援」

・障がい児かかわり方セミナー開催 対象者：畿央大学生および講師依頼に応じて日程調整し開催

・子育て応援ボランティアサークル「Smile」の活動支援

★障がい者の子育て支援「セーフケアプログラム」

■ がんカフェの実施 看護医療学科・看護実践研究センター共催

テーマ：がんの化学療法最新情報と治療と仕事の両立

日時：2026年10月24日（土）13:00～16:00

3. 新規事業

■ 地域貢献活動

2024年の調査研究および研修会のテーマであった中小企業の健康経営推進を図るプロジェクトとして、食生活アプリ等の健康教育プログラムの構築および普及を学内共同研究者とともに進めたいと思います。

■ 調査研究活動

★外国出生結核患者に対する大学生の意識調査の実施

近年日本国内で増加している外国出生結核患者の支援の必要性の理解を目的に大学生の意識調査を行っています。

2026年度もより一層の充実を図り、地域の方々や関係機関専門職に貢献できる活動を推進していきたいと思います。

母子包括ケア部門

部門長：看護医療学科 教授 岡いくよ

部門研究員：講師 澤寛子・助教 堀井有紗

助産学専攻科研究員：教授 岡田公江・准教授 塚田桃代・講師 西原八重美

I. 2025年度事業報告

看護実践研究センター第2期プロジェクト研究助成費を活用して各クラスの備品を充実させることができ、地域貢献活動と研究活動の充実を図ることができました。これまでの活動は畿央大学の研究紀要にも寄稿しました。以下に今年度の活動を報告します。

■ 畿央大学マタニティクラス

本学看護実習室で看護や助産の学生と共に開催しているマタニティクラスは、3年目を迎え、年6回、41家族89名にご参加いただきました。学生の技術、知識は未熟ながら、学んだことを精一杯参加者に伝え、産後の生活を想像し、各家庭に応じた方法を一緒に考えていける時間を工夫しています。今年度は、地元だけでなく、他市町村や大阪からの参加者もあり、認知度の高まりを実感しました。参加された方は、「育児技術を体験して学びたい」「夫や上の子どもに体験させたい」などの様々な思いでご参加くださいました。また、お湯を張った沐浴や、スライムによる「模擬うんち」を使つてのオムツ交換体験、他のカップルと交流することで「出産・育児にむけた具体的なイメージを持つことができた」などのお声を頂きました。担当した学生に向けたアンケートでは「教科書だとイメージが付きにくいところがあったが、実際に話したり、夫婦で相談しているところをみることで、妊娠中にどんな思いで過ごしているのか想像しやすかった」など学修にもつながりました。また「コツやポイントを、授業を思い出して伝えることができた」など、3回生前後に練習した母性看護技術の活用にもなっています。

助産学生は、授業の一環でマタニティクラスを実施しました。今年度は、参加者に『楽しかった』『来てよかった』と思ってもらえるような時間にしたい」と、内容や進行、時間管理や環境調整まで細部にわたって工夫を重ね、当日は卒業生の協力を受けながら行いました。育児体験では、自宅でも見返すことができるように沐浴やおむつ替えなどのポイントをまとめたポスターが好評で、写真を撮られる参加者の姿がみられました。参加者からは、「優しく丁寧に教えてもらえてとても勉強になりました」「とても楽しかった。また来たい」などの感想をいただき、実習前の貴重な学修体験になっています。参加後に、本学のベビークラスへの参加を希望される方も多く、妊娠期から育児を支える一助になれるよう引き続き活動したいです。
(文責：西原八重美)



■ 生まれてすぐの赤ちゃんクラス

生後4か月までの赤ちゃんと保護者を対象とした子育て支援「生まれてすぐの赤ちゃんクラス」を月2回、大学内の和室で開催しました。本クラスは、うた遊びと赤ちゃんへのタッチケアを組み合わせた独自のプログラムに加え、参加者が自由にお話できる時間などで構成されています。参加者がゆったりと対話し、赤ちゃんとの暮らしについて考える時間を共有することを目指しています。

今年度は22回の開催で183組の赤ちゃんパパママにご参加いただきました。また、定員を当初7組にしていたが、すぐ満席となるため10組に増員しました。参加者は「同月齢のママと交流したい」「子育てに関する情報を得たい」など、さまざまな動機でお越しになります。緩やかな交流の中、どなたも終了時には表情が和らぎ、穏やかに帰宅される様子をこちらも幸せな気持ちでお見送りすることができました。

ご協力いただいたアンケートを基に効果を検討し、参加者同士の心理的安全性を基盤とした生活知を共有できる場の意義が示唆されました。実際、初回参加後から生後4か月までの間、継続して参加申し込みをする保護者も多くみられました。次年度はデビュークラスに名前を変更予定です。

(文責：澤寛子)



■ こども園ベビークラス

畿央大学付属広陵こども園の子育て支援室に協力をいただき、今年度も毎月1回17組を定員に開催しました。ありがたいことに、申し込みが始まると即日定員一杯となる反響をいただき、204組の親子がご参加くださいました。毎月「今月で卒業です」と1歳を機に卒業していかれるのはちょっと寂しいのですが、このクラスも丸3年を終え、第2子のご出産後に戻ってきてくださる方も増えてきました。地域を限定しないため、毎回初めての参加の方がいらっしゃいます。また、生まれてすぐの赤ちゃんクラスからの継続でお越しいただけることも多く、賑やかです。初めはハイハイやタッチで動き回る赤ちゃんの様子に驚くママもいらっしゃいますが、参加者みんなの円の中でみんなの赤ちゃんを囲んで、お互いの個性を全肯定して関われる時間に若返りを感じております。育休中のパパもご参加いただけることも増え、回ごとに雰囲気は変わりますが毎回とっても楽しいです。
(文責：岡いくよ)



■ パパのためのベビークラス

9月の土曜日に「ママは立ち入り禁止？パパのためのベビークラス」を開催しました。大学で初めての試みでしたが、ママをあえて立ち入り禁止？にして、パパと赤ちゃんの時間を楽しみました。お陰様で定員の20組はすぐ満員になり、キャンセルが出てすぐに入らなるといふありがたい反響をいただきました。

初めから赤ちゃんを2人だけで来られたパパが多い反面、心配で会場入口まで見守るママの姿もありました。

今回は学生も母性看護学実習の一環として共に企画し、パパと赤ちゃんに喜んでいただけるよう精一杯がんばりました。また、現役保育士の先生方にも研修の一環でご支援いただきました。

学生たちがパパに聞きたいことをアンケートでまとめたサイコロトークでは、目の数にあわせた質問が飛び出します。「パパになって変わったこと」の質問に「誰にもこんな赤ちゃんの時があったのだと思うと、おおらかな気持ちになった」など面白エピソードも登場しました。マタニティクラスや生まれてすぐの赤ちゃんクラスにも継続的にご参加いただけることも増え、初めてのお子さんだけでなく、二人目、三人目の子どもがいるパパもご参加くださいました。学生の感想には「普段あまり聞く機会のない、パパの育児に関するお話を聞かせていただき、地域での育児支援に関する考えが深まりました」「赤ちゃんにも一人ひとり個性があることを知り、それぞれのご家庭での出来事を共有しながら育児について考えることのできる貴重な機会だと感じました」など実践でのリアルな感想を聞くことができました。

次はいつ開催されるのか、複数回開催して欲しいなどのご要望もいただきましたので、次年度からは回数を増やす予定です。

(文責：岡いくよ)



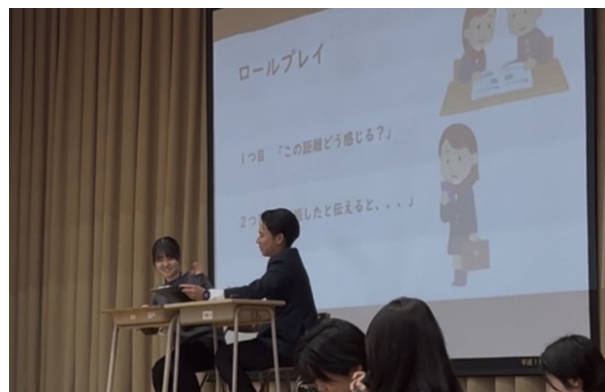
■ セクソロジープロジェクト

2024年度に立ち上げた、看護学生を中心とした性教育プログラム「セクソロジープロジェクト」を発展させ、高校生を対象に、発達段階に応じた「性と生命」に関する教育支援を実施しました。セクソロジープロジェクトには看護医療学科から2024年度は21名、2025年度は19名が参加し、活動しました。当日参加ができなくても計画段階で参画し、対象と年齢の近い学生達が自由な発想で考えたプログラムは、高校生の反応も良く、好評をいただいています。2024年度は3つの高校（西和清陵高等学校、大阪YMCAインターナショナルハイスクール、桜井高等学校）、2025年度は2つの高校（大阪YMCAインターナショナルハイスクール、桜井高等学校）を訪問しました。大阪YMC Aインターナショナルハイスクールには4回生5名が訪問。「総合的な探究の時間」を活用しました。桜井高等学校には3回生4名が訪問し、約300名の2年生に実施しました。

アイスブレイクとして、水を交換する「HIV感染じわじわ広がるゲーム」を行いました。水の交換は性交渉と考え、感染の広がりを視覚的に確認するゲームで、アルカリに反応するとピンクに変色するフェノールフタレイン溶液の特性を用いました。生徒達からは「結構変わってる！」と驚きの声が多くみられ、性感染症の広がりをイメージしてもらうことができました。パーソナルスペースを考えてもらうための劇では、出会い系サイトで出会ってはじめての待ち合わせなど、リアルなシチュエーションを考え、高校の先生方にもご出演いただくことで、楽しみながら学んでもらうことができました。

参加した学生は、自分達が受けた性教育を振り返り、羞恥心への配慮や自分事として考えてもらうための工夫を考え、高校生に性教育を行うことの重要性を感じるなど、計画や実施する側からの学びを得ているようです。今後も大学生が性教育活動を計画実施できる機会の提供や自由な発想や思考で活動できる環境づくりをサポートしていきたいと考えています。

(文責：堀井有紗)



■ 母子包括ケア部門支援者のための研修会

日ごろ、地域や保育施設、病院など様々な場所で親子の支援に尽力する支援者を対象に、職域を超えた支援を考えることを目的に、2025年8月3日と2026年2月22日の夏冬2回に渡り研修会を実施しました。

当日は、保健師、助産師、小学校教諭、幼稚園教諭、保育士など多岐にわたる職種の方々にご参加いただきました。夏の回は『地域の育児支援活動～支援者に必要なスキルを見出すために～』と題し、講演会と交流会の2部構成で行いました。民俗学者の板橋春夫先生を講師にお招きし、『地域が求めた男性産婆～支援者に求められる資質を探る～』をテーマにご講演いただきました。わが国では現在、助産師は女性に限られた職業です。しかし、明治時代には「男性産婆」が存在し、地域の人々から厚い信頼を得て活躍したという興味深い内容でした。男性産婆の事例からも、支援者には高い技術と豊かな経験、確かな信頼性が求められる、と結ばれました。続いて交流会では、大学開催のベビークラスの動画を題材にグループワークを行いました。親子の関わりの短いシーンを見て、それぞれの職種での気づきをディスカッションし、共有しました。同じ助産師という職種であっても、地域あるいは病院での支援という視点では、とらえ方が異なっていたり、教育と保育の視点では、また違う意味付けがなされたりと、様々な側面から親子の関係性、支援の方向性を考える有意義な交流会となりました。また、このワークには助産師志望の看護学生も参加し、活発な意見交換ができました。

冬の研修会では、公認心理師である長谷川博一先生をお迎えして『支援者への贈り物～育児に穏やかさを届けるために～』をテーマに、参加者の皆さんと一緒に、支援者自身が自分と向き合う時間を作る機会を持ちました。終了後は「自分を深く知ることで、隠れている思いなどがあることを良く理解できた。それは自分だけではなく、被支援者

も同じことだと気づいた」「答えだけでなく、その人の持つ背景、心情を深めて考えること、努力することが大切」などの感想をいただきました。1回だけでは時間が足りないため、年1回であっても継続を望む声を多数いただきました。(文責：塚田桃代)



II. 2026年度の事業計画と抱負

1. 継続事業

活動も3年を超え、第1子の妊娠中にご参加くださった方が、出産後のベビークラスを経て再度妊娠され 第2子のお子さんを連れて参加いただいています。また、母性看護学実習で受け持たせていただいた方が、ベビークラスにお越しただけのようになっていきました。地域で区別することなく近隣のどこからでもお越しただくことが可能な、大学発信の利点を活かし、さらに継続的な活動を続けていきたいと考えています。

今年度は奈良教育大学や同附属のこども園、地方自治体からも保育士さんや助産師、教育関係者、公認心理士などが関心を寄せ、見学にお越しくださいました。畿央大学附属広陵こども園の子育て支援室との連携も深まり、出張広場と同日開催する「生まれてすぐの赤ちゃんクラス」には研修として参加いただくこともあります。また、教育学部からも見学にお越しいただいています。今後もそうした研修を受け入れながら、看護、保育、心理など専門性を超え、新たなつながりを創出する機会と位置付けて参ります。支援者がつながることにより、地域の親子を人のネットワークで支え、緩やかな人のつながりを伸ばしていきたいと考えています。このため、そうした共に研鑽できる機会を育む研修会を継続したいと考えます。

2. 新規事業

新規事業を行うことはありませんが、ベビークラスは大変好評をいただいているため、回数を増やして実施させていただくことになりました。参加をご希望いただいている皆さまが参加できないという事態にならないよう、引き続き活動を充実させていきたいです。(文責：岡田公江・岡いくよ)

臨床看護研究部門

部門長：看護医療学科 教授 林田麗

センター長：教授 山本裕子

I. 2025年度事業報告

■文献クリティーク講習会

2025年7月3日(木) 18:00~19:30、7月31(木) 17:00~18:30

看護医療学科教員への研究支援の一環として、自称若手教員を対象に文献クリティーク講習会を開催しました。各回5~6名の若手教員とともに領域を超えても興味もてる看護教育に関連した論文を1本ずつクリティークしました。希望に合わせて量的研究と質的研究を取り上げ、事前課題として各自でクリティークし、講習のなかで意見交換しな

がら、その研究の良いところや課題を明らかにしていきました。日々、教育活動に追われていますが、この時ばかりは研究方法論や論文での結果の示し方、考察の展開についてじっくりと考え、論文の批判的吟味を行いました。教育活動に時間を割かれることが多い中で、研究に向き合い、自身の研究へのヒントを得る機会になることを期待しています。(文責：山本裕子)

■ 科研費セミナー

2025年5月29日(木) 16:30~17:00

6月4日(水)・5日(木) 12:30~13:00

昨年度に続き、看護医療学科教員の研究支援の一環として、看護医療学科教員を対象に科学研究費補助金(科研費)獲得のためセミナーを開催しました。今年度は、新任教員向けの科研費に関する基礎知識、応募書類の書き方、質疑応答の3回で構成しました。別途、希望者には個別相談・指導の機会を設けました。

科研費獲得は自身の研究を進める起爆剤になるほか、キャリアアップや研究者としての自信にもつながります。科研費の応募や採択件数が増えるよう、今後も支援を続けていきたいと思ひます。

(文責：山本裕子)

■ 卒業前看護技術自己トレーニング

2026年2月18日(水)~20日(金) 13:00~16:00

看護実践研究センターの事業の一つにリカレント教育の場として卒業生への支援があります。その一環として、卒業を目前に控えた4年生を対象に、卒業前の看護技術トレーニングの機会を設けました。

臨床現場では日常的に実施する看護技術であるものの、侵襲が大きいため臨地実習では見学にとどまる「採血」「皮下注射・筋肉注射」「輸液・輸液ポンプ」「気管内吸引」「膀胱留置カテーテル」「心電図」を取り上げ、看護医療学科が管理するシミュレータやモデル人形を駆使してのトレーニングを実施しました。

参加学生は14名でしたが、授業と異なり人数が少ないため、学生は丁寧に自分が納得するまで技術のトレーニングに取り組むことができました。教員も目が行き届く分、臨床的なコツを伝えながら、楽しく指導ができました。

学生からは「入職してから看護技術が上手にできるか不安でしたが、トレーニングの数時間でだいぶイメージがわいたので、参加してよかった」「先生がみっちり教えてくださって、授業の時よりもゆっくり何度も挑戦できて良かった。自分の苦手なことにも気づけた」などの感想が聞かれました。

卒業していく学生が、自分の目指す看護師に一歩ずつ近づいていけることを願ひ、活動を続けていきたいと思ひます。(文責：山本裕子)



Ⅱ. 2026年度事業計画と抱負

2026年度は臨床看護の実践と研究の発展に貢献できるように2025度の事業を継続します。詳細は未定ですが、内容が決まり次第、随時、看護実践研究センターのInstagramや大学ホームページから発信していきます。

1. 継続事業

■ 卒後教育研修セミナー

日時・場所・講師・テーマは未定ですが、卒業生が参加しやすいように畿央祭と同日開催を検討中です。また、講師は卒業生に依頼する予定です。講演とワークショップを組み合わせ、参加者間のディスカッションが深まるように企画します。

■ 科研費獲得セミナー（5月開催）

大学での科研費獲得支援事業に先駆けて看護医療学科教員対象の科研費獲得セミナーを開催し、科研費応募件数、採択件数の増加に貢献したいと考えています。

■ 臨床看護研究論文クリティーク講習会（4月～7月開催）

看護医療学科教員への研究支援の一環として、研究論文のクリティーク講習を開催します。

■ 卒業前看護技術トレーニング

看護師国家試験終了後をめぐりに卒業前の看護医療学科4年生を対象に臨床現場で求められる看護技術のトレーニングの機会を提供したいと考えています。

2. 新規事業

■ 看護研究セミナー

看護医療学科教員および卒業生への研究支援の一環として、日々の実践を研究につなげられるよう、看護研究のセミナーを開催します。7月頃の開催を目指し、講師、日程を調整中です。

認知症ケア部門

部門長：看護医療学科 准教授 室谷牧子

部門研究員：講師 島岡昌代・助教 伊藤千春

2025年度は、認知症の方とその家族、および彼らを支える人々が安心して生活できるよう、地域・学生・教員が三位一体となった活動を展開しました。

Ⅰ. 2025年度事業報告

■ 地域貢献活動・教育支援活動

★認知症Café

2025年10月26日（日）13:00～15:30 参加者29名

「畿央祭」にて認知症Caféを開催しました（参加者30名：一般19、発表者5、学生4、教員2）。

認知症当事者・家族・専門職・地域住民が相互理解を深める場の構築を目的に、広陵町・香芝市等のカフェ実施者5名による活動発表および交流会を行いました。アンケートでは満足度94.7%を記録し、「他団体の想いを知り、勉強になった」「つながりを感じた」等の声が寄せられました。カフェ実施者間のネットワーク強化と地域への活動周知に寄与したと考えます。今後も認知症Caféが栄え、誰もが暮らしやすい地域社会の一助となることを願っています。

（文責：島岡昌代）



★大学生のボランティア活動支援

①オレンジProject活動支援

認知症啓発活動を目的とした学生ボランティアサークル「オレンジProject」に対し、以下の活動を支援しました。

a. 畿央祭での認知症カフェの開催支援

現代教育学科・看護医療学科・理学療法学科など多学科の学生が、紙芝居やコグニサイズ、認知症クイズを行い、専門性を活かした多世代交流を実施しました。教員は企画、実施の相談および後方支援を担いました。



b. 関西地区交流会の開催支援

四天王寺大学にて、オレンジProjectに参加している3つの大学（四天王寺・天理・畿央）による交流会が開催され、各校の工夫や強みを共有し、学生の意欲向上と横のつながりを強化しました。教員は、交流のサポートを担いました。今後も、オレンジProjectの横の繋がりも大切にしながら、益々活発な活動が増えていくことを期待しています。

(文責：島岡昌代)



②学生のボランティア活動支援

2025年度は、日本認知症ケア学会の助成を受け、1年生の「認知症ケア論」履修者やOB・学生有志ら計50名が以下の活動を実施しました。

a. 認知症マップおよび「ロバ隊長」の製作

b. 多世代向け地域認知症啓発活動（夏休み多世代カフェの開催／会場：エコール・マミ）

c. 地域ボランティア活動（安堵町しゃべり場、安堵町キッズサポーター養成講座、特別養護老人ホーム和里、麦の会共同作業所）

d. 認知症ケア部門の活動協力

これらの活動において認知症ケア部門の研究員は、大学生の認知症に対する理解を深めるとともに、学生自身が地域社会へ出向き、学生の力で正しい理解を広めていく取り組みに注力しています。特にボランティア活動については、学生の都合に合わせて単発でも自由に参加できるように、近隣の関係機関と協力して都度募集を行いました。このように研究員は、学生による社会貢献と地域共生社会の実現に向けた活動を、後方から継続的に支援しています。



(文責：室谷牧子)



■ 教育・研修活動

「共に考える」をテーマに、講師と参加者の距離を縮めたディスカッション形式の研修会を開催しました。

★研修会「認知症の人と家族支援を考える」

2025年8月4日（月）13：30～15：30（参加者50名）

1部：研修会講師 山川みやえ氏（大阪大学大学院准教授）

グループワーク

2部：トークセッション

山川みやえ氏×平井正明氏（まほろば倶楽部）



★研修会「認知症の人と家族の支援を考えよう」

2025年11月30日（日）13：30～15：30（参加者43名）

1部：研修会講師 松本一生氏（松本診療所院長）

2部：グループディスカッション（進行 松本一生氏）

講師や認知症当事者の貴重なお話に加え、同じ立場の方々とのディスカッションに対し、多くの参加者から高い満足度をいただきました。学生もグループワークに参加することで異世代交流が生まれ、共生社会のあり方を建設的に模索する機会となりました。

多くの地域関係者、学生に協力をいただき心から感謝申し上げます。

（文責：室谷牧子）



■ 啓発活動

★大学生へのアルツハイマー月間

啓発周知活動：2025年9月26日（金）

看護医療学科の学生有志11名が大学内で「アルツハイマー月間」および「新しい認知症観」についての周知活動を行いました。

活動内容は「新しい認知症観」の概要と私たちにできることをまとめたカード200枚を配布し、任意で認知症に関する意識調査を行いました。その結果「アルツハイマー月間を知っているか」という問いには、166名中119名の約72%が「知らない」、「新しい認知症観を知っているか」という問いには、158名中の138名の約88%の学生が「知らない」と回答しており、認知度の低さが明らかになりました。

今後も認知症への関心を高められるよう、学生主体の活動への支援を続けていきたいと考えています。

（文責：伊藤千春）



II. 2026年度事業計画と抱負

認知症ケア部門では、次年度はこれまでの基盤を維持しつつ、認知症の人と家族、支援者、そして地域社会の豊かなあり方を模索します。特に、ケアの担い手である現役世代のQOL（生活の質）向上と、未来を担う学生の育成を活動の柱に据えます。学生が認知症を「遠い存在」ではなく「自らの課題」として捉え、超高齢社会に対して主体的に発信できる機会を創出することで、本学の地理的利便性を活かした新たな地域共生モデルの構築に取り組んで参ります。

1. 継続事業

■ 教育・研修活動：広域ネットワークによる専門職支援

近隣市町村や実習関連施設を中心としたネットワークを強化し、本学の地理的利便性を活かして、市町村の枠を越えた専門職向け研修を開催します。

2026年度は「セルフネグレクトへの介入」や「孤立防止」をテーマとし、実践的な知見を共有します。

■ 啓発活動：学生主体のアルツハイマー月間企画

9月のアルツハイマー月間を中心に、学生が主体となって企画・運営する啓発イベントを支援します。学生自らが地域社会へ発信するプロセスを通じて、次世代を担うリーダーを育成します。

2. 新規事業

■ 地域貢献活動：介護者のセルフケア支援

「介護と自身の生き方」に焦点を当てた研修（年3回）を開催し、少子高齢化の中で、介護者が自らの人生を犠牲にせず、疲弊しないための考え方を共に深める交流会を実施し、心理的・社会的支援の場を提供します。

■ 調査研究：多角的な認知症認識調査

「大学生の理解度」と「現役世代（働き盛り）の介護認識」の2軸で調査を行い、この結果をもとに、次年度以降の効果的な啓発・地域アプローチのあり方を検討します。



畿央大学 看護実践研究センター

〒635-0832

奈良県北葛城郡広陵町馬見中4-2-2

TEL：0745-54-1602 FAX：0745-54-1600

Email：nprc-core@kio.ac.jp

